洋上アルプス

No.317　2021年8月5日

発行
林野庁屋久島森林生態系保全センター

バックナンバーや屋久島国有林における入林申請等は
こちらにあります
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1
TEL0997-42-0331　FAX0997-42-0333

屋久島世界遺産地域科学委員会・ヤクシカWG合同会議を開催

（6月29日～30日）

令和３年度第１回世界遺産地域科学委員会とヤクシカ･ワーキンググループ(以下ヤクシカ WG)及び特定鳥獣保護管理検討委員会の合同会議が２日間にわたり実施されました。

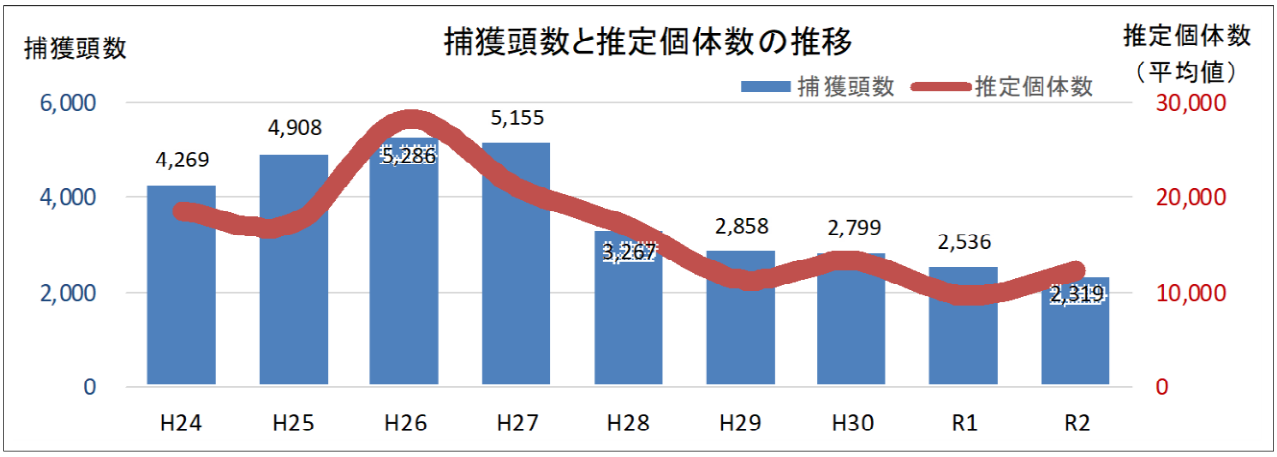
本年度も昨年と同様に新型コロナ感染拡大防止のため、リモートによる会議となり、各関係機関の皆様には会場の準備また、通信状況の確認などご苦労いただきました。

■ヤクシカＷＧの概要（6 月 29 日）

会議では、鹿児島県、九州地方環境事務所、屋久島町及び九州森林管理局からヤクシカの生息状況と捕獲状況について説明がありました。

生息状況は昨年と比較し増加傾向になったとの報告がありました。一方、捕獲頭数については減少傾向にあります。

各関係機関とも生態系保護の観点から効率的な捕獲に取り組むことを確認しました。



ヤクシカWG資料　改変

■科学委員会（6 月 30 日）

科学委員会の主な議題は､①屋久島世界遺産地域管理計画の実績状況について②令和３年度屋久島世界遺産地域モニタリング調査等計画について③屋久島世界遺産地域管理計画等についてなど各機関から説明がありました。

九州森林管理局からは令和２年度世界遺産地域モニタリング調査結果及び令和３年度世界遺産地域モニタリング計画（高層湿原の植生状況モニタリング調査及び保全対策、著名ヤクスギの樹勢診断）について説明がありました。

委員からは環境省、林野庁及び各関係機関が連携して保全対策を行うよう意見が出されました。

上空から見た花之江河

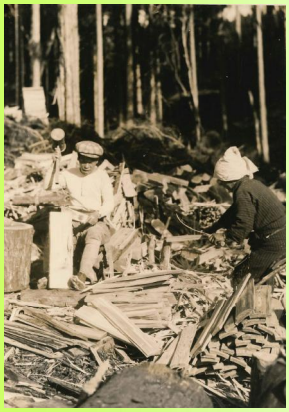
平木作りの体験　（7月6日）

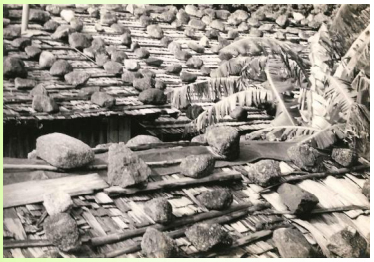
小杉谷閉山50周年イベントにて平木を用いて屋根を作る催しがあり、平行して材料となる平木を作る体験を行う予定としており、それに向けて歴史民俗資料館の協力を得て平木作りを体験しました。

平木作りは、ブロック状にした材木に平木割り専用の細長い鉈を目印の線に合わせて上から添え、その鉈を藁打ちに使うような木槌で強めに叩き、木を割ります。上手くいけば木は真っ直ぐに割れ、それが厚さ1cm前後の平木になります。木目に沿って割るためか思ったより簡単に割れますが、節が途中にあると難しさが跳ね上がるそうです。昭和30年代までは、写真のように平木を作り、屋根の材料としていました。

歴史民俗資料館では屋久島の歴史や民俗をテーマとした興味深い展示を見学できます。皆様も機会があれば是非お立ち寄りください。

平木作りの様子





（左）当時の平木作りの様子
（上）平木を葺いた屋根

職員による有害鳥獣捕獲を実施　（6月14日）

ヤクシカによる生態系への影響が指摘される中、今年度も当保全センター職員実行によるヤクシカの有害鳥獣捕獲を開始しました。

昨年度より使用した、くくり罠に捕獲されると電子メールにより自動的に通知が来るシステム、長距離無線式捕獲パトロール（通称：ほかパト）を本年度も使用し、より効率的な捕獲に務めることとしました。

昨年は、島内全体で2,319頭が捕獲されました。

当保全センターでは罠の設置にあたり、カラスザンショウなどを誘因用餌として利用し、シカの通り道や足跡を全職員で観察、罠の設置箇所を検討することで捕獲頭数の向上に努めます。

二人一組で罠を設置

センサーカメラ及びほかパトを設置する職員

荒川軌道敷にある案内板の清掃　（6月15日）

森林保護員（グリーンサポートスタッフ：通称GSS）による森林パトロールを実施しています。

荒川軌道敷には、小杉谷集落を紹介する案内板など多数ありますが、永年の降雨による汚れにより見にくくなっており、今回は洗剤等を用いて案内板の清掃を実施しました。

軌道沿いにはヤクスギ育成複層林についての説明板もありますので、ご覧ください。

荒川軌道敷にある案内板を清掃するGSS

屋久島憲法100周年 （第2回）

――― 委託林利用の実態 ―――

中島 成久 （法政大学名誉教授、大阪大学博士〔国際公共政策〕）

「屋久島国有林経営の大綱」（屋久島憲法）で各集落に合計 7,000ha の委託林が与えられた。上屋久営林署が作成した「委託林関係一覧表」（昭和 8 ～ 12 年）には、上屋久村内の小瀬田、椨川・楠川、宮之浦、志戸子、一湊、吉田、永田・瀬切の 7 集落の委託林利用の詳細が記されている。屋久島森林生態系保全センターの林友和所長のご厚意によって、貴重な資料の一部を以下紹介する。

小瀬田では、総戸数 90、受託者数 78、実行組合加入者数 78、委託林面積 316ha、年伐標準面積 12.66ha である。昭和 10 年前後に各集落に委託林実行組合が結成され、委託林経営の中心となった。

委託林利用は自家用と稼用に分けられる。昭和 8 年（1933）の小瀬田では自家用 2.32ha、稼用は用材と薪材（木炭製造用）合計で 8.68ha であるが、昭和 11 年には自家用が減り、稼用が 10.24ha に増えている。各集落では用材としてシイ、タブ、モッコク、クロマツ、シラカシ、サクラ、スギ、バリバリ、オガタマ、ザツ、ナギ、アカカシ、ウリハダカエデ、ヤマグルマ、フカノキ、アブラギリ、ハリギリ、ヤマハゼなどが利用されている。薪材用には、カシ、ザツが挙げられているが、『屋久町郷土誌』には他にイス、シイ、シロカシ、アカカシ、松などがある。

次に、実行組合の収支状況を見る。昭和 8 年小瀬田実行組合の収入は出資金 500 円、製品売上代 4,960 円、その他 47 円、計 5,507 円（端数切捨て）。支出は資材払下げ代 618 円、賃金 2,743 円、事業材料 94 円、その他 166 円、計 3,621 円。差し引き 1,885 円の利益である。宮本常一は『屋久島民俗誌』の中で「小瀬田は委託林を最も効率的に経営している村である。・・・利益の積立金でまずは小学校の改築に利用された」と述べている（64 頁）が、それが裏付けられた。

さらに、作業別従業者数並びに収得高調べと題する統計がある。作業は杣夫、製炭夫、炭材請け切り日従、薪切、運搬夫（用材馬地引）、袋制作に分れている。杣夫は男の仕事で 13 人いて、標準賃金 1 円 70 銭、月就業日数 18 日、収得賃金 30 円 60 銭。製炭夫は男の仕事で、それぞれ 11 人、1 円、28 日、28 円。炭材請け切り日従は男の仕事で、それぞれ 20 人、80 銭、10 日、8 円。薪切とはできた炭を短く切る仕事で、男女とも行うが賃金が違う。男は 55 人いて、日当 90 銭、月 15 日就業して 13 円 50 銭の収入。女は 20 人いて、日当 65 銭、月 5 日就業して、3 円 25 銭の収入。運搬夫は男の仕事で、5 名、日当 2 円、月 10 日就業 20 円の収入。炭袋制作は女の仕事で、日当 50 銭、月 10 日働き、5 円の収入。昭和 11 年度生産見込み量は 5 万枚とされている。

ある指標では昭和 10 年（1935）の大工手間賃 1 日 3 円、日雇い労働者日当 1 円 20 銭である。委託林経営収入の多くは集落に還元され、個人の所得という観点からは家計の一部をまかなうに過ぎなかった。（つづく）

写真. 小瀬田共用林組合記念碑
（林友和氏撮影）

屋久島生態系モニタリング

屋久島西部地域の垂直方向植生モニタリング（令和元年度）

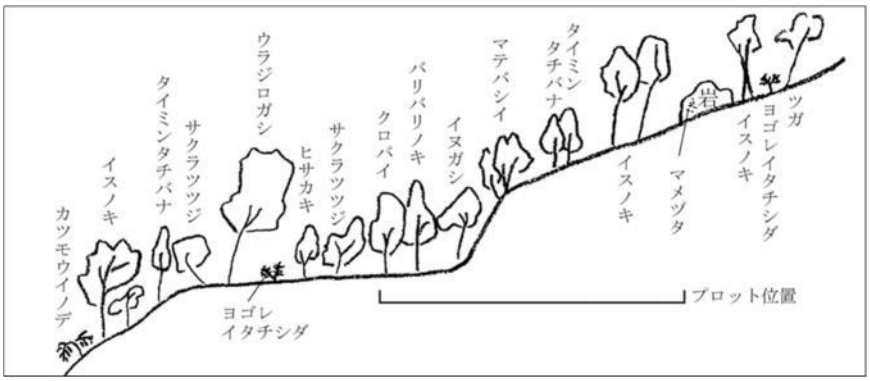
●標高600mプロット（急傾斜の痩せ尾根を挟んで南側は岩石地、北側は崩壊地になっており、ヤクタネゴヨウ高木・亜高木が4本（1本は枯死を確認）出現 ）

［植生概況］ 高木層はイスノキが優占するが、遷移途中を表す落葉広葉樹が混交する。滝があるため空中湿度が高く、崖地でシカの侵入箇所が限定されるため、植物種数が多かった。

［優占種の変化］

階層区分	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和1年度
高木層（6.0m～21.0m）	イスノキ	イスノキ	イスノキ	イスノキ
亜高木層（3.0m～6.0m）	クロバイ	クロバイ	クロバイ	タイミンタチバナ
低木層（1.0m～3.0m）	ヒサカキ	ヒサカキ	ヒサカキ	サクラツツジ
草本層（1.0m未満）	ウラジロ	ウラジロ	ウラジロ	ヨゴレイタチシダ

［階層毎の木本数］ 平成26年度の高木層の本数が突出して多いのは、おそらく亜高木―高木層の境界線上の個体の多くが高木層にカウントされている。本年度は平成21年度以前の本数構成に戻っている。攪乱が起きやすく、落葉広葉樹も見られ、低木層が他の標高の調査地より安定して多かった。



新連載

屋久島における外来種（前編）

鹿児島県 外来動植物対策推進員　池田裕二

外来種という言葉をご存じでしょうか。ざっくりと、「明治以降、本来その地域にいなかったのに、ヒトの活動によって他の地域から導入された動植物」とイメージしてください。

現在、国内には 2000 種類を超える外来種がいるともいわれます。屋久島では植物だけで 141 種類が確認されています*。その中には、自然環境への影響があるとされる「侵略的外来種」を多数含みます。

オオキンケイギクの花

危険度ランクが一番高い外来種は、法律で栽培や生きたままの移動等が厳しく制限されている「特定外来生物」に指定され、島内ではオオキンケイギク、オオフサモ、ボタンウキクサの 3 種の植物が確認されています。

これら3種を含め、山間部や世界遺産地域で深刻な問題を起こしている外来種の植物は、幸いにも未だ無いと考えています。しかし、急激に増えてしまう危険もあるため、これ以上広がらないように防除することが大切です。

外来種問題は環境問題です。私の故郷の埼玉では、水辺でアメリカザリガニやウシガエルが繁殖し、それをアライグマが食べに来る、という状態です。そうなってしまっては遅いのです。

屋久島の自然は人類の宝物です。外来種問題は地域全体で真剣に考えていきましょう。

＊田中優太朗・田中麻理（2018）. 屋久島における外来植物の観察記録　Nature of Kagoshima **44**, 383-386.
http://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_044/044-056.pdf